

コミュニケーション形態が フォリナー・トークに及ぼす影響

徳永 あかね

要 旨

フォリナー・トーク (foreigner talk) は Ferguson (1971) によって、接触場面において母語話者がとるレジスター (register/言語使用領域) のひとつとして特徴づけられたものである。当時は、コミュニケーションの形態という観点からみると、研究の対象はほとんどが相手を目の前にした対面によるものであった。しかし、昨今の科学技術の進歩は対面の枠に収まらない様々のコミュニケーション形態を生み出している。

本稿では、空間も時間も共有しない、日本語母語話者と非母語話者の間でなされるメールという媒体を使ったコミュニケーションにおける母語話者の調整行動を取り上げ、これまで定式化されてきた日本語におけるフォリナー・トーク (ロング 1992ab, 1995) との比較を試みた。その結果、フォリナー・トークの特徴として指摘されていたもののいくつかが実は対面というコミュニケーションの形態によるものであることが分かった。コミュニケーション形態の違いに視点をおいたフォリナー・トーク研究の必要性が示唆された。

【キーワード】フォリナー・トーク, 日本語母語話者, コミュニケーション形態, 対面, メール

1. はじめに

接触場面において円滑なコミュニケーションの実現を目指して母語話者がとる言語行動 (以下、「調整」と記す) を対象として、これまで社会言語学や言語習得研究の領域において多くの研究が進められてきた。

ファーガソン (Charles A. Ferguson, 1921-1998) は、当該言語の力が十分ではない相手とのコミュニケーションを維持するために、母語話者が自らの発話を様々な形で調整する現象に注目し、それを母語話者のレジスター (register/言語使用領域) のひとつとして「フォリナー・トーク (foreigner talk) (Ferguson 1971) と命名し、以降英語をはじめ日本語も含めて様々の言語を対象として研究がなされてきた。しかし、ファーガソンをはじめフォリナー・トーク研究が研究対象としているコミュニケーションの形態は殆どが対面によるものである。他方、科学技術の発展に伴い、今日では、対面に加えて、電話、ファックス、コンピュータなどの機器を媒体とした様々のコミュニケーションの形態が日常的にみられるようになってきている。機器を媒体とするコミュニケーションと対面によるコミュニケーションとで異なる点は、一つにはコミュニケーションの空間を両者が共有するか否かということにある。対面の場

合には空間を共有していることから、当該言語が十分ではない相手に対し、言葉での調整以外にも身振り手振りなどの非言語的手段を用いることも、また相手の理解の程度を相手の表情などから目で確認することも出来る。他方メールやチャットなどの機器を媒体としたコミュニケーションの場合、コミュニケーションの担い手である両者が空間を共有できないため、非言語や視覚的手段が使えず、調整はいきおい言語に頼らざるを得なくなる。さらにファックスや電子メール (以下、「メール」と記す) になると、空間に加えて時間も共有されない。そのため、調整は、対面や電話のようにコミュニケーションの現場で随時に行うことは出来ない。このように、母語話者の調整の仕方は、コミュニケーションの形態によって、様々な影響を受けることが考えられる。

2. フォリナー・トークの定義

母語話者が非母語話者に対して調整を行うことによって表出する現象は「フォリナー・トーク (foreigner talk) として論じられてきた。これは1960年代後半にファーガソン (Charles A. Ferguson, 1921-1998) によって明らかにされた現象で、続く Ferguson (1971) においてあらためて定義付けられた。

日本語におけるフォリナー・トークについて論じたものはスクータリデス (1981) が最初である。その後、ロング (1992b) で日本語母語話者の対外国人言語行動をフォリナー・トークという観点から分析しその特徴が明らかにされた。この時分析に使われたデータは、欧米系日本語非母語話者が道端で出会った日本語母語話者に道を尋ねた際の応答の音声資料を文字化したもの (ロング 1992a) 及びオーストラリア在住日本語母語話者を対象としてスクータリデスが抽出したもの (スクータリデス 1981) である。ロングはこれにさらに修正を加え、日本語のフォリナー・トークの特徴を提示した (ロング 1995)。

一方、欧米諸言語を対象とするフォリナー・トーク研究では、80年代の一時期、フォリナー・トークを広義に解釈する研究も行われた。例えば、対面場面で外国人に向けて実際に発せられる発話だけでなく、フィクションの文章のなかで使用される「外国人的な話し方」もフォリナー・トークとして分析されている (Valdman 1981, 徳永 2003a)。しかしその後はこのような研究報告はほとんど見られず、フォリナー・トークは対面でのコミュニケーションに限られるようになっていった。例えば『ロングマン応用言語学辞典』の「フォリナー・トーク」の項では、「ある言語の母語話者が、その言語に堪能ではない外国人に話しかける時によく使う発話 (Richards, Platt and Weber 1985 山崎・高橋・佐藤・日野訳 1988: 139, 下線筆者。)」と定義づけられている。

近年、日本語を対象とするフォリナー・トーク研究では、対面以外のコミュニケーション形態で行なわれる非母語話者に向けた母語話者の調整もその対象とされるようになってきた。メモや手紙などを媒体とする「書く」行為に見られる調整は、フォリナー・トークに対して「フォリナー・ライティング¹⁾」 (大平 2002) という用語も新たに使用され始めている。大平 (2002) は日本語母語話者がイギリス人と日本人のそれぞれに宛てた「誘いに対する断りの手紙」を分析資料として社会言語的調整の特徴を探り、「断り方や敬語の単純化というフォリナー・トークと共通する特徴のほか、呼称や手紙の形式において、英語的な表現の取り入れが観察された」 (大平: 223) と報告している。手紙は確かに「書く行為」であることから、「フォリナー・ライティ

ング (foreigner writing)」と命名することにも一理ある。しかしながら、メールやチャットなどのコンピュータを使った言語行動は、「話す=talk」「書く=writing」のいずれにも完全には包括されない。また、コミュニケーションの形態毎に新たな呼称をつけていくことでは、母語話者の調整として一般化できる特徴を掬い取ることができなくなる。そこで本研究では、従来のフォリナー・トーク研究が母語話者の対面での発話を分析対象として来たことに着目し、手紙やメールを対面とはコミュニケーション形態が異なるものとして捉え、この形態に着目した研究視点を提案することを目指す。つまり、口頭言語による母語話者の調整をフォリナー・トークとし、書記言語による母語話者の調整をフォリナー・ライティングとすることに見られるようなアプローチではなく、媒体の違いによりコミュニケーションの形態が異なることを踏まえ、それらのコミュニケーションの形態の異なりがどのように、母語話者の調整に影響を及ぼすか、という観点からアプローチし個々の特徴を浮き彫りにすることを通して、最終的には、それらの背後にある共通点を探り出し、抽象的なレベルでフォリナー・トークを定義することが可能となるのではないだろうか。

本稿では、その一ステップとして、メールというコミュニケーションの形態を取り上げることで、定説となっているフォリナー・トークの特徴の幾つかが実は対面というコミュニケーションの形態に起因するものであることを明らかにしたい。

3. 対象とするデータ

本研究では、日本人学生が留学生 (初級レベル) に書いたメールをデータ対象とする。対面については、先述したロング (1995) を使う。

メールのデータとしては、2002年4月末～6月初旬に日本人学生7名が、留学生 (初級レベル) とのメール交換で書いたメールと、後日、調査者との間で個別に行われたフォローアップ・インタビューの文字化資料を使用した。メール交換は1対1ではなく、メールリストを利用して行われた。メールリストとは、数名のグループで1つのメールアドレスを共有し、そのアドレスにメールを送れば、グループメンバー全員に配信されるシステムを言う。一つのグループに日本人学生、留学生各2、3人ずつを担当教員が任意に割り振った (表1)。

なお、表中の NS は Native Speaker (母語話者) の略でここでは日本人学生を表し、NNS は Non-Native Speaker (非母語話者) の略でここでは留学生を表す。

表1. メール交換グループメンバー

グループ1			グループ2		
NS1	男	1年生	NS3	女	2年生
NS2	女	4年生			
NNS1	男	中国	NNS4	男	内モンゴル
NNS2	男	中国	NNS5	女	中国
NNS3	女	ドイツ	NNS6	女	中国

グループ3			グループ4		
NS4	女	2年生	NS6	女	2年生
NS5	女	3年生	NS7	女	3年生
NNS7	男	中国	NNS10	女	中国
NNS8	女	中国	NNS11	女	中国
NNS9	女	韓国	NNS12	女	韓国

メール交換が始まる前と途中の2回、互いに顔をあわせる機会を設けた。留学生はコンピュータの授業の中で一週間に一度のペースで、通算5回メールを送信した。一方、日本人学生は、日本語教授法クラス²を履修する学生たちであったが、授業外で適宜、留学生へメールを送った。このメール交換を始めるにあたってはコンピュータの担当教員より「留学生からのメールに返事を書いて欲しい」ということ他、メールの内容、形式に関しての教示は与えなかった。

メール交換期間終了後に、最低3回以上返信メールを書いた日本人学生へ研究協力を依頼し、承諾した7名のメール32通を本稿では分析対象とした。メール交換期間中に留学生宛てて書いたメールのどの部分が留学生対象に調整した箇所なのかを識別するために、メールの内容は変えずに日本人宛てに書くとしたらどう書くのか、考えて再度メールを書くようにという教示を与えて、日本人学生宛としてメールを書き直してもらった。この書き直したメールと元々の留学生宛のメールとで、書き方が異なる部分を、相手が日本語非母語話者である点に着目して調整したものと規定し考察の対象とした。さらに、その部分についてフォローアップ・インタビューの中で取り上げ、なぜそのような調整を行ったのかについての説明を求めた。なお、メールにおける調整の分類の詳細は、徳永(2003b)を参照されたい。

4. 結果と考察

対面の母語話者の調整の特徴として、「日本語における対外国人言語行動」(ロング 1995)のなかから、「語彙面」、「文法面」における特徴と例を引用し³、この二つの面で対応する項目を本研究のデータと対照させた。以下結果を述べる。

4.1 語彙面

ロングでは、一旦発した言葉の意味に対して、相手の表情などから不理解を察知して、別の解釈を与えること(釈義)や、言いさしにして、もっと簡単に分かってもらえそうな他の語彙に言い換える(同義語による言い換え)といった現象を取り上げている。しかし、本研究が対象としたメールのデータにはこのような調整は見られなかった。これらは、何れも対面であることに因って引き起こされた調整であろうと考えられる。他方、メールは対面と違い即時的なやりとりではないので、調整をするとしても、やりとりの最中ではなく、実際のやりとりに先行して行われることがその理由であると考えられる。例えば、対面であれば、相手の分からないというシグナルを察知するや否や直ちに相手に分かってもらえそうな言い方に言い換えるという調整をすることができるであろう。つまり、オンラインであるがために事前に十分な調整の余裕がない対面では、言葉を発しその言葉に対する相手の反応によって事後的に調整が施されると言える。そのため、ロングの提示にあるように、単語レベルでの言い換え(表2参照)が頻発すると考えられる。

次に、調整が事前に行われるメールの場合には、気持ちや状況を正確に伝えることよりも、相手が理解しやすいように、伝えたいことを多少犠牲にしてもよいという姿勢での調整が優先されることが分かった。例えば表2に示した、日本人宛てに使った「たらふく食べてきました」を留学生宛てでは「いろんなものを食べました」のように基本的な語彙に調整した日本人学生はフォローアップ・インタビューで、『「たらふく」ではなく、「いろんなものを食べました」と言うのと、自分が満足いくまでたくさん食べることができた、という当時の状況や気持ちを伝えることは難しいが、「たらふく食べた」、というように日本人学生同士でよく使う表現では相手に通じないと思い、調整した』と述べている。同様の意見は他の母語話者からも聞かれた。

以上まとめると、メールでは相手にメッセージ

を発するのに先立って調整を行うなかで、語彙が慎重に選ばれ、平易な語彙や表現が用いられる。その際、本来伝えたい内容に満たないことであっても、まず大まかな点で相手に理解してもらうための調整が優先されると言える。一方、対面では発話の前に語彙を十分に吟味する時間が持たないことからコミュニケーションの現場で調整が行われる。そのため、言葉を発した直後に調整が施され、結果、単語の羅列になる現象や、表2に示したように「歩いて、ウォーク、ウォークでね」のような日本語に相手の母語を交えた言い換えが出現すると考えられる。

4.2 文法面での比較

4.2.1 簡略化が起こる理由

表3に示すように、対面の文法面での特徴としては、単語の羅列や短い文の頻用、複雑な文構造の回避が見られるが、メールにおいても同様に複文を回避し、なるべく短い文で書こうとする調整が見られた。しかし、メールでは文法的な正しさが守られ、対面のように、単語のみを羅列するような調整は見られなかった。さらにメールに見られる調整は、文法的な正しさの範囲内のものに限定されると同時に、主語や助詞の過剰使用という調整も見られた。これはメールにおいては事前に推敲が容易に出来るというコミュニケーション形態の特徴が影響したものと考えられる。

メールにおいて調整が施される場合、文字を入力しながら調整を施す方法と、一旦入力した文を読み直し、調整を施していく方法とがある。1通のメールでこの両方の調整も可能である。特にコンピュータのキーボード操作に慣れている者であれば、一度書いた文の訂正が容易にでき、何度も推敲し、書き直すことが可能である。そのためより多くの調整が施されることになる。フォローアップ・インタビューにおいて「留学生宛のメールは、通常のメールよりも書き上げるのに時間がかかった」と全員が述べていることから、今回のメールでは何度も調整が施されたことがわかる。この点については、今後、

機器を媒体とするコミュニケーションでの調整を分析する際、被調査者の属性と同様に、媒体となる機器の操作スキルについても要因とし考える必要がある。

4.2.2 補足的、説明的な文の使用

事前の調整が容易に出来るメールがもたらす特徴として、「補足的、説明的な文の追加」が見られた。これは、語彙に関する説明を入れることで、日本語非母語話者である読み手が理解しやすいようにするための調整である。例えば表3の例の「沖縄」は、日本人なら地理的な位置も含めて当然知っている地名であるが、留学生は知らないと予測し、「沖縄」について、「日本の一番南」という説明を直後につけるという調整が行われている。また、「久しぶり」の意味がわからないと予測し、「久しぶり」の代わりに「長い間会っていなかったの」という説明的な表現に換えている。その上で、複文を避けるため、2つの短い文に分けるという調整をしている。

また、表3で示した例のように、説明の部分を修飾という形で語彙の前後に追加する方法の他に、文の構造そのものを換える例も見られた。例えば日本人宛なら「長野の実家に帰りました」と書くだけのところを、「私の実家のある長野に帰りました」と書き、説明を加えたために長野に帰った、という文自体の構造も変わってしまうものなどである。

対面では、コミュニケーションの現場で時間を共有できるため、発した言葉の後に続けて必要な説明を次々と追加していくことが可能である。また、空間も共有されるため、必要に応じて身振り手振りで相手の理解を得ることもできる。しかし、メールの場合には時間も空間も共有されないため、言語のみに頼らざるを得ない。結果として補足的、説明的な文が多く用いられることが考えられる。

表2. 語彙面での調整現象

	特徴	データ例
対面	<ul style="list-style-type: none"> ・臨時借用語の使用 ・訳語の使用 ・外来語の頻用 ・積義 ・同義語による言い換え 	<u>臨時借用語使用例</u> 日本の police もしっかりしている... <u>訳語の使用例</u> 歩いてね、ウォーク、ウォークでね <u>積義の使用例</u> 高速道路…速い、高いスピード道路 <u>同義語による言い換え例</u> 冷房がついていません…クーラーがありません
		<ul style="list-style-type: none"> ・漢字と他の表記方法との併用 ・平易な語彙の使用 ・略語、若者言葉、慣用語の回避

表3. 文法面での調整現象

	特徴	データ例
対面	<ul style="list-style-type: none"> ・短い文の頻用 ・格助詞の省略 ・複雑な文構造の回避 ・敬語、丁寧体の回避 ・指定表現「ダ」の省略 	<u>短い文の頻用、格助詞の省略、例</u> 今ここです。（うん）枚方の駅ここです。（うん）これはこの前の道です。（うん） 外大これです。 <u>指定表現「ダ」の省略</u> こちらのま一、歩いて三分。（あそうですか）あちらは五分。
		<ul style="list-style-type: none"> ・複文の回避 ・主語、助詞の過剰使用 ・名詞修飾、引用句の使用 ・補足的、説明的な文の追加 ・丁寧体の使用

5. まとめ

コミュニケーション形態の違いに焦点を当て、対面での調整とメールでの調整の特徴とその結果表出される現象について比較対照したところ、対面においてもメールにおいても相手の理解を助けるという同様の意図で調整が行われていることが確認できた。一方、従来、フォリナー・トークの特徴とされてきた「単語の羅列」や「非文法的文」といった現象が、実は対面というコミュニケーション形態が引き起こしていることも明らかになった。このことは、対面では空間や時間が共有できるのに対し、メールではそれができないことによる影響が大きい。例えば「単語の羅列現象」は相手とのコミュニケーションを維持するために会話を遂行しながら調整されるという対面の性質に負っているものであり、一方送信に先行して調整が必要な部分が予測され、事前に調整が施されるメールの場合にはそのような現象が見られない。ここから、従来フォリナー・トークとして定式化されてきた特徴が、実は対面というコミュニケーション形態の影響を受けた現象であることが分かる。

つまり、対面の域に収まらない様々なコミュニケーション形態に見られる母語話者の調整は、基本的には従来のフォリナー・トークと同じように「相手とのコミュニケーションを維持するために行われる調整」であるが、形態の違いから現象の違いを生じさせているのであって、背景のメカニズムは共通するものであると言えよう。今後、対面以外のコミュニケーション形態の場合における調整の仕方を探り、それらを対照することを通して、そこに通底する特徴だけを取り出す形でフォリナー・トークを再定義していくことの必要性が示唆される。

これまでの国内外のフォリナー・トーク研究を概観した大平(2001)が指摘するように、フォリナー・トークの現象が起きる背景やそのメカニズムは完全に明らかにされているとは言えない。しかし、コミュニケーション形態の違いからその現象を分析していくことを通して、普遍的な調整のメカニズム、言い換えれば、フォリナー・トークの現象が見られる背景やそのメカニズムの解明へとつながっていくであろう。また、形態の違いと同時に未だ分析が行われていない他の要因、例え

ばコミュニケーション相手の属性、会話の種類や目的などの検証も必要である。

科学技術の発展とともに、一昔前には想像できなかったようなコミュニケーション形態が生まれ、人々を取り巻く社会環境も変化していく。研究とその知見には、それが行われた時代の社会文化的な背景が前提にあることをふまえ、必要に応じ、研究の視点を追加し、過去の知見を再検証して、それを踏まえて先へ進むことが必要であると考え

注

1. 「フォリナー・ライティング」の用語は鄭(1999)によるものであるが、実証的な研究は大平(2002)で始まった。
2. 日本語教育養成課程の科目「日本語教授法Ⅰ」を履修している学生。この時点では実習を含め、日本語を教えた経験はない。
3. ロング(1995)では、他にc.音声面、d.談話面、e.非言語行動の特徴も挙げているが、メールでは元よりこうした行為自体が行われないため、ここでは比較対象としなかった。

参考文献

- 大平未央子(2001)「フォリナー・トーク研究の現状と展望」『言語文化研究』27, 大阪大学言語文化部, 335-354.
- 大平未央子(2002)「日本語のフォリナー・ライティングにおける社会言語的調整—ネイティブ・ライティングとの比較および調整のメカニズム—」『言語文化研究』28, 大阪大学言語文化部, 211-228.
- スクータリデス・アリーナ(1981)「日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45号 日本語教育学会 53-62.
- 鄭恵充(1999)「書きことばによる‘接触場面’における母語話者側の言語的調整—‘フォリナー・ライティング’の概念形成に向けて」『第4回社会言語科学会研究大会予稿集』
- 徳永あかね(2003a)「日本語のフォリナー・トーク研究—その来歴と課題—」『第二言語習得・教育の最前線』日本言語文化学会研究会 162-175.
- 徳永あかね(2003b)「Foreigner Writingにおける語彙調整—日本人学生・留学生のメール交換より—」『神田外語大学紀要』第15号 233-247.
- ロング・ダニエル(1992a)「対外国人言語行動の実態」『日本語研究センター報告』1 大阪樟蔭女子大学日本語研究センター
- ロング・ダニエル(1992b)「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォリナー・トークを中

心にー』『日本語学』11 卷 13 号 明治書院 24-32.
ロング・ダニエル (1995) 「フォリナー・トークに
対する意識」『日本語教育における社会言語学的基
盤』文部省科学研究費総合 (A) 研究成果報告書
11-24.
Ferguson, C.A. (1971) Absence of copula and the notion of
simplicity : A study of normal speech, baby talk,
foreigner talk, and pidgins, Dell Hymes
(Ed.) ,Pidginization and Creolization in Language,
Cambridge : Cambridge University Press, 141-150.
Ferguson, C. A. (1981) 'Foreigner talk' as the name of a

simplified register, *International Journal of the Sociology
of Language*, 28, 9-18.

Richards, J., Platt, J. and Weber, H. (1985) *Longman
dictionary of applied linguistics*. (山崎真穂・高橋貞
雄・佐藤久美子・日野信行訳 1988 『ロングマン応
用言語学用語辞典』南雲堂)

Valdman, A. (1981) Sociolinguistic aspects of foreigner
talk, *International Journal of the Sociology of
Language*, 28, 41-52.

とくなが あかね／神田外語大学留学生別科

akane@kanda.kuis.ac.jp

An Examination of the Effect of Different Communication Types on “Foreigner Talk”

TOKUNAGA Akane

Abstract

Although 'foreigner talk' was examined and classified by Ferguson (1971), as one of the many registers used by a native speaker, the types of communication which were analyzed were basically limited to 'face to face' communication i.e. talking. However, with the development of technology, the way people communicate has also changed. We have moved beyond Ferguson's original research parameters.

In this article, I will examine Japanese foreigner talk as it occurs in email and in 'face to face' communication. In doing this I will examine the differences between these two types of communication. Finally, I will discuss a few of the differences / phenomenon which occur in Foreigner Talk depending on the type of communication used. This discussion, I believe, will lead to the conclusion that we need to develop a research framework which considers a number of different communication types.

【Keywords】 foreigner talk, Japanese native speaker, communication types, face to face, e-mail

(Kanda University of International Studies)